

「屈原」に就いて

吉井涼子

序論

『楚辭』の現存最古のテキストは、後漢時代に王逸がまとめた『楚辭章句』である。その冒頭、離騷の序に、
離騷經者、屈原之所作也。屈原與楚同姓、仕於懷王、爲三閭大夫。三閭之職、掌王族三姓、曰昭・屈・景。屈原序其譜屬、率其賢良、以厲國士。入則與王圖議政事、決定嫌疑。出則監察羣下、應對諸侯。謀行修行、王甚珍之。同列大夫上官・靳尚妒害其能、共譖毀之。王乃疏屈原。屈原執履忠貞而被讒害、憂心煩亂、不知所愬、乃作離騷經。離、別也。騷、愁也。經、徑也。言己放逐離別、中心愁思、猶依道徑、以風諫君也。故上述唐・虞・三后之制、下序桀・紂・羿・澆之敗、冀君覺悟、反於正道而還己也。是時、秦昭王使張儀譎詐懷王、今絕齊交。又使誘楚、請與俱會武關、遂脅與俱歸、拘留不遣、卒客死於秦。其子襄王、復用讒言、遷屈原於江南。屈原放在草野、復作九章、援天引聖、以自證明、終不見省。不忍以清白久居濁世、遂赴汨淵自沈而死。

と、離騷は屈原の作であり、その屈原は、王族で三閭大夫の身分にあり且つ有能な人であったが、清廉潔白であったが故に却って讒を被り、やがて放逐され、入水して果てたとある。これは、世に廣く膾炙した「屈原」像そのものである。

「屈原」と聞けば、誰しもかかかる「悲劇の憂國詩人」のイメージを先ず思い浮かべるかと思う。「屈原」の實在性が疑わしくなって久しいが、私も例に漏れず、やはり先ずはそのイメージを想起してしまう。それほど「屈原」の印象は鮮やかである。

しかしながら、所謂「屈原」の信賴性が不確實な以上は、當然「屈原」ありきの『楚辭』の讀解は行われるべきではない。『楚辭』に収められた歌謠群で、王逸が「屈原」作としているものは、離騷・九歌・天問・九章・遠遊・卜居・漁父・大招である。このうちで、「屈原」の代表作たるものは間違いなく「離騷」であろう。この「離騷」の冒頭部分には、

帝高陽之苗裔兮、朕皇孝曰伯庸。 帝高陽（顓頊）の苗裔、朕が皇孝は伯庸と曰ふ。

攝提貞于孟陬兮、惟庚寅吾以降。 攝提孟陬に貞まり、惟れ庚寅吾以て降れり。

皇覽揆余初度兮、肇錫余以嘉名。 皇覽て余を初度はかに揆り、初めて余に賜ふに嘉名を以てす。

名余曰正則兮、字余曰靈均。 余に名づけて正則と曰ひ、余に字して靈均と曰ふ。

との句があり、爾來これを多くの研究者が「屈原」の自叙と信じ、「屈原」の名と附會させる爲に様々な説を唱えて來たが、この本文だけを素直に見たならば、この作者、もしくは離騷篇の主人公の名が「正則」、字が「靈均」であると言うことしか述べられておらず、「屈原」の名は全く認められない。

この「離騷」が、假に悲劇の憂國詩人「屈原」の作ではない可能性があるならば、この作品は誰が作ったのか。そして、「屈原」とはいったいどこから現れ、なぜ「離騷の作者」となったのか。

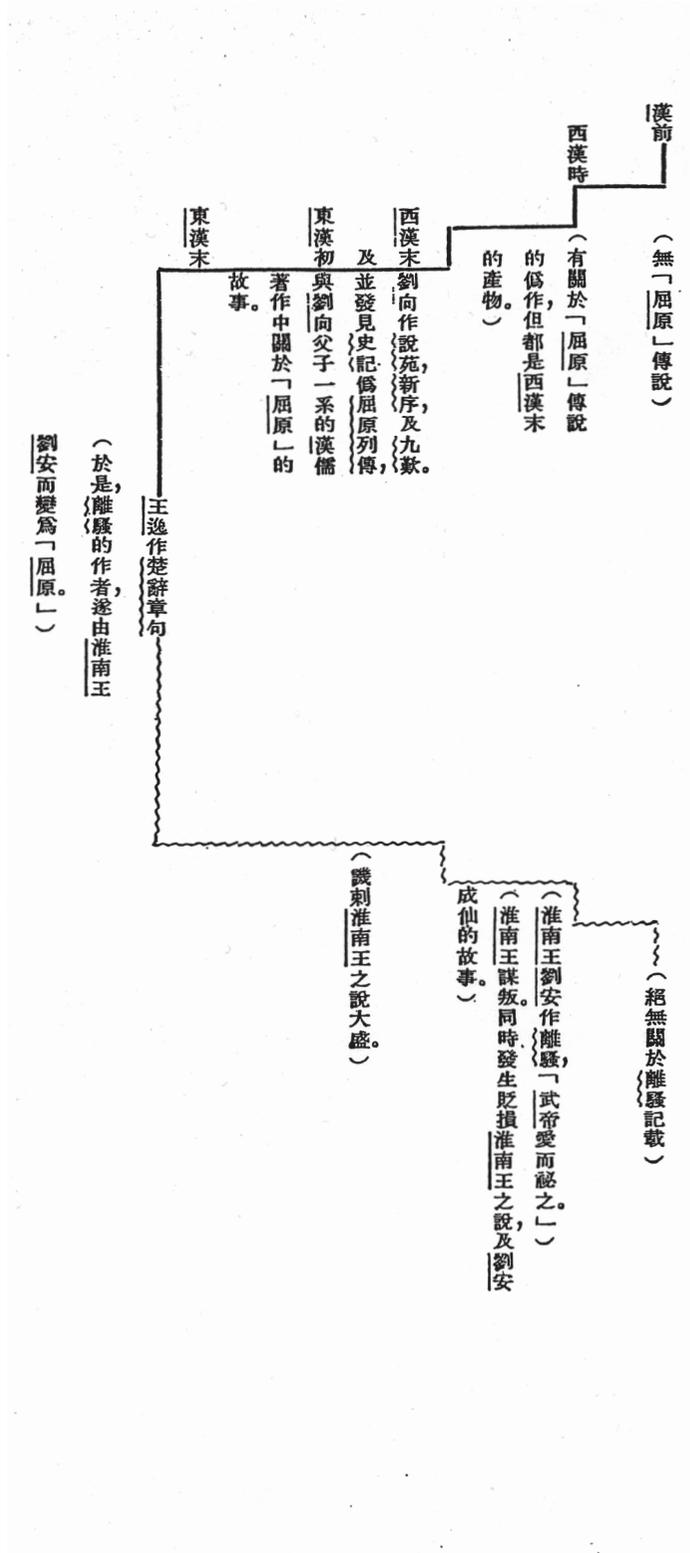
本論攷では、改めてこの「屈原」と「離騷」との関係と、「屈原」なるひとはどこから來たのかを整理し、檢證を加えるものである。

なお、論者は、悲劇の憂國詩人たる「屈原」に就いては、架空の人物像であると考えており、「離騷」の作者を淮南王劉安とする何天行の否定論に概ね賛成する立場であるので、先に何天行の説を紹介しておきたい。しかしながら、資料が膨大

で要約が困難であるので、何天行が檢證の際に分類した十四の項目の要點のみ紹介し、同書の「『屈原』傳説的源流與淮南王故事變遷圖」を轉寫しておく。また、屈原否定論の全體像は、稻畑耕一郎が纏めておられるので、そちらを参照していただく。何天行は、

- ① 「離騷」の冒頭は、夏曆であり、戰國楚の用いた殷曆ではない。
- ② 「離騷」で「長」を「修」に作るのは、劉安の父の諱を避けた爲である。
- ③ 作中に香草が多いのは、劉安が神仙思想を好んだ爲である。
- ④ 「離騷」に見える「桂」「菌桂」は戰國時代にはなく、武帝の時代に中國に入ってきたものである。
- ⑤ 登場人物の「彭咸」は水死者ではなく、巫祝である。
- ⑥ 史書に見える劉安の經歷と「離騷」は對應している。
- ⑦ 「離騷」に表現された神仙思想は、秦漢時代の版圖の擴大を反映している。
- ⑧ 「遠遊」と「離騷」は神仙思想を諂っている點で同じであるが、明確に漢代の作とわかる「遠遊」と違い、「離騷」は漢代作だとわかりにくかった。
- ⑨ 「離騷」にある「體解」の刑は秦代にできたものである。
- ⑩ 文字に誤りがあるのは、漢代以降の轉寫によって生じたものであり、古文から今文への移行で生じたものではない。
- ⑪ 『楚辭』の音韻は上古音より漢代のものに近い。
- ⑫ 「離騷」に表されている神話は、秦代以降の文獻に見える。
- ⑬ 劉安著の『淮南子』との類似表現が十數箇所ある。
- ⑭ 秦漢時代の偽作である「皐陶謨」「舜典」を踏まえた記述がある。

と述べて、「離騷」は劉安の作であると斷定している。^(注2)次に、『屈原』傳説的源流與淮南王故事變遷圖」を示しておく。



この圖にあるとおり、何天行は、賈誼の弔屈原賦も後人の偽作とするが、論者はこの作品自体はそうは考えていない。

第一章 「屈原」像の展開——「離騷」との関わりに就いて——

論を進めるにあたり、改めて「屈原」の名が見える文献と、「離騷」との関わりを整理したい。

1 賈誼 弔屈原賦

「屈原」の名が確認できる最古の作品は、所収が『史記』賈生列傳ではあるものの、賈誼の弔屈原賦である。『文選』所収のものには序が附されており、

誼爲長沙王太傅既以謫去意不自得。及渡湘水爲賦以弔屈原。屈原楚賢臣也。被讒放逐作離騷賦。其終篇曰已矣哉、國無人兮莫我知也。遂自投汨羅而死。誼追傷之因自喻其辭曰。

とあつて、「屈原」が「離騷」の作者であり、楚の賢臣であつたとあるが、これは賈誼自身の記した序ではなく、『漢書』賈誼傳からの引用であるから、^(注3)少なくとも後漢以降の文章である。そこで、賦の本文のみを見てみると、

恭承嘉惠兮、俟罪長沙。

恭しく嘉惠を承り、罪を長沙に俟つ。

側聞屈原兮、自沈汨羅。

側聞する屈原、自ら汨羅に沈むを。

造託湘流兮、敬弔先生。

造りて湘流に託し、敬んで先生を弔う。

遭世罔極兮、乃殞厥身。

世の罔極に遭い、乃ち厥の身を殞とす。

嗚呼哀哉、逢時不祥。

嗚呼哀しいかな、時の不祥に逢う。

鸞鳳伏竄兮、鴟梟翱翔。

鸞鳳は伏竄し、鴟梟は翱翔す。

闕茸尊顯兮、讒諛得志。

闕茸は尊顯せられ、讒諛して志を得。

賢聖逆曳兮、方正倒植。

賢聖は逆曳せられ、方正は倒植せらる。

世謂隨夷爲濶兮、謂跖躡爲廉。

世隨夷を謂ひて濶とし、跖躡を謂ひて廉とす。

莫邪爲鈍兮、鉛刀爲銛。

莫邪をば鈍とし、鉛刀をば銛とす。

吁嗟默默、生之無故兮。

吁嗟默默たり、生の故無きや。

幹棄周鼎、寶康瓠兮。

周鼎を幹棄し、康瓠を寶とす。

騰駕罷牛、騶蹇驢兮。

罷牛に騰駕し、蹇驢を騶とす。

驥垂兩耳、服鹽車兮。

驥兩耳を垂れ、鹽車に服せらる。

章甫薦履、漸不可久兮。

章甫を履に薦くは、漸く久しくすべからず。

嗟苦先生、獨離此咎兮。

嗟苦先生、獨り此の咎に離る。

訊曰、已矣。

訊に曰く、已ぬるかな。

國其莫我知兮、獨壹鬱其誰語。

國に其れ我を知る莫く、獨り壹鬱として其れ誰に語らん。

鳳漂漂其高逝兮、固自引而遠去。

鳳漂漂として其れ高く逝き、固より自ら引いて遠去す。

襲九淵之神龍兮、沕深潛以自珍。

九淵を襲う神龍、沕として深潛し以て自ら珍とす。

偃蠖獺以隱處兮、夫豈從蝦與蛭蟪。

蠖獺に偃きて以て隱處す、夫れ豈に蝦と蛭蟪に従はんや。

所貴聖人之神德兮、遠濁世而自藏。

貴ぶ所 聖人の神德、濁世に遠ざかりて自ら藏る。

使騏驥可得係而羈兮、豈云異夫犬羊。

騏驥をして係ぎて羈すを得べからしめば、豈に夫の犬羊に異なると云はん。

般紛紛其離此尤兮、亦夫子之故也。

般として紛紛として其れ此の尤に離るも、亦た夫子の故なり。

歷九州而相其君兮、何必懷此都也。

九州を歴て其の君を相けば、何ぞ必ず此の都を懷はん。

鳳凰翔于千仞兮、覽德輝而下之。

鳳凰千仞を翔けて、德輝けるを覽て之に下る。

見細德之險微兮、遙曾擊而去之。

細德の險微を見れば、遙かに曾擊して之を去る。

彼尋常之汙瀆兮、豈能容夫吞舟之巨魚。

彼の尋常の汙瀆、豈に能く夫の吞舟の巨魚を容れんや。

橫江湖之鱣鯨兮、固將制於螻蟻。

江湖に横たはる鱣鯨、將に螻蟻に制せられんとす。

とあり、特に「訊曰」以下の文が「離騷」の亂辭によく似ており、「離此咎」「離此尤」との言葉があるものの、「離騷」を作った云々の記述は見えない。

ここで看取し得る確かな情報は、

・この當時、「屈原」が汨羅で自沈したという話が（少なくとも長沙のあたりには）あった。
・「屈原」は、「嗚呼哀哉、逢時不祥。」という境遇であった。
ということのみで、「屈原」の身分や具體的な來歴は一切見えないのである。

2 劉安 離騷傳

一方で、「離騷」の名が初めて確認できるのは、これよりやや時代が下る。『漢書』卷四十四淮南王安傳に、淮南王安爲人好書、鼓琴、不喜戈獵狗馳騁、亦欲以行陰德拊循百姓、流名譽、招致賓客方術之士數千人、作爲内書二十一篇、外書甚衆、又有中編八卷、言神仙黃白之術、亦二十餘萬言。時武帝方好藝文、以安屬爲諸父、辯博善爲文辭、甚尊重之。每爲報書及賜、常召司馬相如等視草乃遣。初、安入朝、獻所作内篇、新出、上愛祕之。使爲離騷傳、旦受詔、日食時上。

と、「離騷傳」の形で見えるのがそれである。ここには、淮南王の劉安は、文藝音樂を好んで軍事を好まず、百姓に陰徳を施して名譽を得、賓客方術の士を多く集めて内書二十一卷や多くの外書と中編八卷を作り、神仙黃白之の術を述べること二十餘萬言であった。時の武帝もやはり文藝を好んでおり、劉安を諸父とし、辯博で文辭が巧みであったので非常に重んじた。常に司馬相如らを召して草稿を見せては送っていた。劉安が初めて入朝した時に献上した内篇や新出を、武帝は愛して秘藏とした。劉安に「離騷傳」を作らせたが、劉安は早朝に詔を受けて晝にはもう献上した、とある。この「離騷傳」に就

いては、本文は失逸して傳わらないとされるが、これは「離騷」の注釋ではなく一つの作品と考えるべきであろう。それは、この「傳」字に就いて、王念孫が、「傳當爲傳。傳與賦古字通。」と言う様に「離騷賦」と解するべきだからである。^(註4)多くの研究者が、これを「屈原」の「離騷」の傳（注釋書）、或いは「屈原」の「離騷」の要約と考えてきたが、この「漢書」本文中には、やはり作者であるはずの「屈原」の名はない。

ここで「離騷賦」と呼ばれる作品と、現行の「離騷」とが、果たしてどのような関係にあるのかは非常に大きな問題である。その疑問に就いてはこの後で少し述べるが、詳しい檢證はまた後日に論じたい。

3 『史記』屈原列傳

『史記』屈原列傳には、

屈原者、名平、楚之同姓也。爲楚懷王左徒。博聞彊志、明於治亂、嫻於辭令。入則與王圖議國事、以出號令。出則接遇賓客、應對諸侯。王甚任之。上官大夫與之同列、爭寵而心害其能。懷王使屈原造爲憲令、屈平屬草稟未定。上官大夫見而欲奪之、屈平不與、因讒之曰、王使屈平爲令、衆莫不知、每一令出、平伐其功、曰以爲非我莫能爲也。王怒而疏屈平。屈平疾王聽之不聰也、讒諂之蔽明也、邪曲之害公也、方正之不容也、故憂愁幽思而作離騷。離騷者、猶離憂也。……屈平正道直行、竭忠盡智以事其君、讒人聞之、可謂窮矣。信而見疑、忠而被謗、能無怨乎。屈平之作離騷、蓋自怨生也。とあり、最後には、頃襄王によって放逐された屈原が懷沙之賦を詠み、そして、

於是懷石遂自沈汨羅以死。

と締めくくられている。

これは誰しもが良く知る悲劇の憂國詩人たる「屈原」像そのものである。また、ここで初めて「屈原」と「離騷」が一緒

に見え、更に「離騷」の作者である「屈原」の名は「平」であり、「原」は字であると解説されている。つまり、所謂「屈原」と「離騷」、そして彼に附随する一大ストーリーは、『史記』屈原列傳に至つて漸く完成しているように見えるのである。但し、何天行等の述べる様に、もし假にこの屈原列傳が劉向等後人の偽作と考えるならば、結局は「屈原」の成立は後漢初期あたりまで下ることになる。

4 劉向 新序

そこで、次に劉向の新序を見てみると、

屈原者、名平。楚之同姓大夫。有博通之知、清潔之行、懷王用之。秦欲吞滅諸侯、并兼天下。屈原爲楚東使于齊以結強黨。秦國患之、使張儀之楚。貨楚貴臣上官大夫靳尚之屬、上及令子蘭・司馬子椒、内賂夫人鄭袖、共譖屈原。屈原遂放于外、乃作離騷。……

と、明らかに「屈原」の、それも『史記』屈原傳同様のかなり詳細な情報が現れている。そして、ここにもはっきりと「離騷」を作ったと記されているから、遅くとも劉向の時代までには、「屈原」像は確立していたことがわかる。

5 劉向 九歎

同じく劉向の九歎にも、悲劇の憂國詩人「屈原」と、「離騷」を踏まえた表現が多く見て取れる。ここでは九歎のうち逢紛の冒頭のみ挙げておく。

伊伯庸之未胄兮、諒皇直之屈原。云余肇祖于高陽兮、惟楚懷之嬋連。原生受命于貞節兮、鴻永路有嘉名。齊名字於天地

兮、竝光明於列星。……

この九歎には、現行の「離騷」の文に基づいた句が非常に多いことが、ここから明らかである。つまり、劉向の時代の「離騷」は、略現在のもと同じであると考えられる。

以上は、賈誼の弔屈原賦から後漢の文獻までの概観であり、例えば弔屈原賦に所謂「屈原」の詳しい來歴が描かれていないからと言つて、その説話・傳説が當時なかつたと言う證明には無論ならない。しかしながら、やはり穩當に考えれば、悲劇の憂國詩人「屈原」像は、『史記』屈原列傳が司馬遷作であれば『史記』の成立した頃までに、若しくは何天行等の指摘する如く、屈原列傳が後人の加筆とするならば後漢初期までに、漸次形成されていったものと見るべきであろう。そして、もし後者であるならば、それにはやはり劉向が大いに關わつている可能性があることが理解できた。

第二章 水死と水神の發生母體に關して

次に「屈原」を構成する二大要素のうち一つ——即ち水死——に就いて考察する。こちらは漸次作り上げられていったと思われる「憂國詩人」の顔とは違い、賈誼の弔屈原賦に既に明確に現れている要素である。

以下に述べる様に、中國の神話傳説中には水死者が非常に多い。例えば、「離騷」に、主人公が良き伴侶を求め彷徨する場面があるが、その中に、

吾令豐隆乘雲、求宓妃之所在。

とある宓妃とは洛水の女神である。この女神は、『文選』卷十九洛神賦の序の李善注には、

漢書音義、如淳曰、宓妃、宓義氏之女。溺死洛水爲神。

とあって、やはり元は洛水で溺死したものであったことが知られる。

王逸が「屈原」作であるとする九歌の歌謠の中にも、水神が多く見られる。河伯篇の洪興祖序に引く『抱朴子』釋鬼篇には次の様にある。

馮夷以八月上庚日渡河溺死、天帝署爲河伯。

つまり、黄河の神である河伯も、もとは黄河で溺れた馮夷と言う名の水死者であったことになる。また、同九歌の湘君と湘夫人も水神である。劉向『列女傳』卷一の有虞二妃には、

有虞二妃者、帝堯之二女也。長娥皇、次女英。……舜陟方死于蒼梧號曰重華。二妃死于江湘之間。俗謂之湘君。

とあり、『水經注』卷二十八の湘水の條には、

湘水又北逕黃陵亭西、右合黃陵水口、其水上承大湖、湖水西流、逕二妃廟南、世謂之黃陵廟也。言大舜之陟方也、二妃從征、溺于湘江。神遊洞庭之淵、出入瀟湘之浦。瀟者、水清深也。

と記されていて、こちらでは溺死したとなっている。この様に中國に於いて水死したものがその水神となったという例は枚舉に暇がない。

それでは、汨羅で入水したとされる「屈原」はどうであろうか。

現在では、「屈原」と關連の深い行事として、江南地方で端午節に競渡が行われるのは良く知られているが、『荊楚歲時記』の五月五日の條に、

是日競渡採雜藥。

按五月五日競渡俗、爲屈原投汨羅日傷其死所。故並命舟楫以拯之。舸舟取其輕利、謂之飛鳧。一自以爲水車、一自以爲水馬。州將及土人悉臨水而觀之。蓋越人以舟爲車、以楫爲馬也。邯鄲淳曹娥碑云、「五月五日時迎伍君。逆濤而上爲水所淹。」斯又東吳之俗事在子胥。不關屈平也。越地傳云、起於越王勾踐。不可詳矣。是日競採雜藥。夏小正云此日蓄

藥以蠲除毒氣。

とある様に、實は對象は伍子胥の場合もあつて、「屈原」に限定されていたわけではなかつた。更に言えば、黃石が、端午派這天、人們只忙着祭瘟神遂疫、心裏全然沒有屈原半點影子、有也沒工夫理會他、自己的生存要緊、還是趕快做當務之急、有神心、除祖宗之外、就祭祀瘟神、連別的廟也懶得去燒香了。

としている如く、^(注7)競渡は元は送瘟船の儀禮だったのであるが、次第に「屈原」の祭祀と習合され、「楚國遺民尚且把屈原置在瘟神之列、作出大不敬的法事來、眞不知『弔』字從何說起。」と、「屈原」の像を送瘟船に載せて一緒に流す場合も見られるのである。^(注8)守屋美都雄は、

それでは、競渡を以て楚の詩人屈原を救うための行事とする説はどこから生まれたのであろうか。それについては明確な斷言はできないが、一つには河中の雨神の實體が次第に人格化されて、それが屈原という人物に結びつけられたと思われるし、また一つには、むかし河中の雨神に對して人身御供を行った時代があつて、その人身が屈原に結びつけられたのではないかとも思われるのである。一言添えておきたいことは、この悲劇の主人公は必ずしも屈原に限らないという點である。一般には競渡の起源は屈原の投身に結びつけられる場合が多いけれども、後述する曹娥碑の伍子胥の例もあり、地方によつて傳説の主人公は異なつてゐる。ただ、これらの人物のいずれも屍を水中に沈めたと傳えられてゐるところに一つの共通點があり、そこに人身御供の遺制といった想像も生れうるわけである。

と非常に鋭い指摘をしている。^(注9)また、『史記』滑稽列傳にも興味深い話が載つてゐる。それは、次の如くである。

褚先生曰、……魏文侯時、西門豹爲鄴令。豹往到鄴、會長老、問之民所疾苦。長老曰、「苦爲河伯娶婦、以故貧」豹問其故、對曰、「鄴三老・廷掾常歲賦斂百姓、收取其錢得數百萬、用其二三十萬爲河伯娶婦、與祝巫共分其餘錢持歸。當其時、巫行視小家女好者、云是當爲河伯婦、卽娉取。洗沐之、爲治新繒綺縠衣、閒居齋戒。爲治齋宮河上、張緹絳帳、女居其中。爲具牛酒飯食、十餘日。共粉飾之、如嫁女床席、令女居其上、浮之河中。始浮、行數十里乃沒。其人家有好

女者、恐大巫祝爲河伯取之、以故多持女遠逃亡。以故城中益空無人、又困貧、所從來久遠矣。民人俗語曰『卽不爲河伯娶婦、水來漂没、溺其人民』云。」西門豹曰、「至爲河伯娶婦時、願三老・巫祝・父老送女河上、幸來告語之、吾亦往送女。」皆曰、「諾。」

至其時、西門豹往會之河上。三老・官屬・豪長者・里父老皆會、以人民往觀之者三二千人。其巫、老女子也、已年七十。從弟子女十人所、皆衣繒單衣、立大巫後。西門豹曰、「呼河伯婦來、視其好醜。」卽將女出帳中、來至前。豹視之、顧謂三老・巫祝・父老曰、「是女子不好、煩大巫嫗爲入報河伯、得更求好女、後日送之。」卽使吏卒共抱大巫嫗投河中。有頃、曰、「巫嫗何久也。弟子趣之。」復以弟子一人投河中。有頃、曰、「弟子何久也。復使一人趣之。」復投一弟子河中。凡投三弟子。西門豹曰、「巫嫗弟子是女子也。不能白事、煩三老爲入白之。」復投三老河中。精門豹簪筆磬折、嚮河立待良久。長老・吏傍觀者皆驚恐。西門豹顧曰、「巫嫗・三老不來還、柰之何。」欲復使廷掾與豪長者一人入趣之。皆叩頭、叩頭且破、額血流地、色如死灰。西門豹曰、「諾、且留待之須臾。」須臾、豹曰、「廷掾起矣。狀河伯留客之久、若皆罷去歸矣。」

と、魏の文侯の時代に西門豹なる鄴令が、巫祝による河伯の娶嫁儀禮の爲に人身供犠を差し出さねばならず苦しめられていた人々を、逆に巫祝等祭祀を取り仕切っていた者たちを黄河に沈めて救ったと言うものである。この話に就いて森三樹三郎は、

これは神話と呼ぶには餘りに現實的な話である。この話によつて、河伯に人身御供が行はれてゐたこと知られると共に、かかる風習を利用して私腹を肥やす巫祝や俗吏があつたことも判る。

と述べる。^(註10)しかしながら論者は、より注目すべきはこの話の後半、つまり巫祝を河川に沈めたという部分だと思ふ。ここでは、私腹を肥やし民を苦しめる巫祝等が、西門豹によつて黄河に沈められるという内容になつてはいるが、普通の人間を差し出して期待する効果の齎されなかつたときには、更に巫祝をこれに充てる場合があつた可能性を窺うことができる。も

しくは、そもそも巫祝を人身供犠に用いていた場合もあつたかも知れない。

なお、先に引いた『荆楚歲時記』に、「邯鄲淳曹娥碑云、五月五日時迎伍君。逆濤而上爲水所淹。」と、五月五日の伍君（伍子胥）を迎える祭祀の際に水に吞まれたとの記述があり、それがいったい誰かと言つと、『後漢書』列女傳に、

孝女曹娥者、會稽上虞人也。父盱、能絃歌、爲巫祝。漢安二年五月五日、於縣江沂濤婆娑迎神、溺死、不得屍骸。娥年十四、乃沿江號哭、晝夜不絕聲、旬有七日、遂投江而死。

とあるとおり、曹娥の父で巫祝であつた盱であつたことがわかる。つまり彼は、五月五日に伍子胥を迎える「婆娑迎神」の際に溺死して、遺體が見つからなかつたのである。

第三章 蛇巫と水神

「離騷」の亂辭に、

亂曰、已矣哉。

亂に曰く、已ぬるかな。

國無人莫我知兮、又何懷乎故都。

國に人無く我を知る莫し、又何ぞ故都を懷はん。

既莫足與爲美政兮、吾將從彭咸之所居。

既に美政を爲すに足る莫し。吾將に彭咸の居所從わんとす。

とある。この「彭咸」に就いては、この上文に既に「雖不周於今之人兮、願依彭咸之遺則」との句が見えており、その王逸注に、「彭咸、殷賢大夫、諫其君不聽、自投水而死。」と言ふ。「彭咸」を殷の賢大夫とし、また入水して死んだとするのは、この王逸注に始まる。

果たして「彭咸」に關しては諸説あるが、論者は、これは「巫彭」と「巫咸」の併稱であると考ええる。それは概ね、王瑗が『楚辭集解』で、

按劉向九歎・靈懷篇曰、九年之中不吾反兮、思彭咸之水遊。王逸之說或本之劉向、而顏師古或本之王逸者、但不知劉向何所攷據而云然也。蓋嘗讀太史公世家有曰彭祖者、乃帝高陽顓頊氏之玄孫、陸終之第三子也。虞翻註曰、彭祖名翦、封於彭城、爲彭姓。神仙傳云、彭祖者、殷賢大夫也、姓錢名鏗。系本亦云錢鏗、是爲彭祖。又按大戴禮・虞德篇有商老彭之語、包氏註曰、商賢大夫。論語・述而篇有竊比老彭之語、朱子註亦曰商賢大夫。考其德而論其世、稽其姓而辯其名、則曰彭咸、曰彭鏗、曰彭翦、曰彭祖、曰老彭、曰錢鏗、其實爲一人也明矣。

と、王逸の注は、劉向九歎・靈懷の文言からのものであり、『史記』『神仙傳』などの記述から、彭咸・彭鏗・彭翦・彭祖・老彭・錢鏗は皆同一人であると言う如くであるが、但しこの中で「巫咸」に就いては、「巫彭」とは別の人物であろうと思う。なぜならば、「離騷」に、「巫咸將夕降兮、懷椒糈而要之。」と、「巫咸」が單獨で見える部分があり、且つ以下に引く『山海經』等にも「巫彭」と共にその名が見えるからである。(注1)

巫彭の名は、『山海經』海内西經に、

開明東有巫彭・不抵・巫陽・巫履・巫凡・府相、夾窳窳之戶、皆操不死之藥以距之。窳窳者、蛇身人面、貳負臣所殺也。

と記されており、更には大荒西經に、

有靈山、巫咸・巫即・巫盼・巫彭・巫姑・巫眞・巫禮・巫抵・巫謝・巫羅十巫、從此升降、百藥爰在。

とある。また、この巫咸は、海外西經に、

巫咸國在女丑北、右手操青蛇、左手操赤蛇、在登葆山、群巫所從上下也。

と、左右の手に青蛇・赤蛇を操り、群巫を従えていたと記されている。

なお、この様な蛇を操る圖像は、楚地域出土の戦國期の文物に多く描かれている。それら―特に曾侯乙墓出土の文物に描かれた圖像に就いて、稲畑耕一郎は、

五弦琴にも、鳥形紋や菱形紋とともに、交龍の上にうずくまったような姿の人の像が描かれている。……兩耳のあたりには蛇が見える。身體部分は、龍蛇形のものであるが、また長袖の寛衣を着て、兩手で蛇をつかんでいるように見える。この像を夏后啓にあてる解釋がある。それは、『山海經』の「大荒西經」に夏后啓（開）が二匹の青蛇を耳飾りとし、二匹の龍に乗っているという記述があり、かつ啓は「九辯」「九歌」という天上の音楽を得てこの世に下ったという傳承に基づく。……

このかぎりでは、夏后啓説は合理的であるようであるが、蛇を耳飾りとし、雙龍に乗るのは、啓だけの固有の特徴ではない。……

そこで思うに、これは特定のどの神でもなく、龍蛇を自在に驅使する蛇巫の姿を描いたものではないかということである。やはり長臺闌楚墓から出土した錦瑟にも、兩手にそれぞれ龍蛇をもって立つ巫の姿が描かれている。……

さて、基調となる龍蛇の紋様がそのようなものとして理解できるとすれば、その間に描かれる人面の像は何であるうか。それらはこの龍蛇を驅使する神の姿と考えられはしまいか。『山海經』などによれば、各地到るところに龍蛇を操るさまざまな神がいたことが記されている。觀念の上では神であり、龍であるが、實際にやってみせたのは巫であり、用いられたのは蛇である。巫が蛇を操って各種の呪術を行うことに、人々は神が龍を驅使する姿を幻視した。龍蛇の間に描かれる異形の人は、この龍蛇を自在に操って死者の再生を可能とする神、すなわち蛇巫の姿と理解しておきたい。

と論じる。^(註12)

實は、この様な蛇巫の表現は、先に觸れた河伯・湘君・湘夫人にも共通して見られるものである。河伯（馮夷）は、『山海經』海内北經に、

從極之淵深三百仞、維冰夷恒都焉。冰夷人面、乘兩龍。一曰忠極之淵。

とあつて「乘兩龍」と表されている。ここでは「冰夷」となつてはいるが、郭璞注に、「冰夷、馮夷也。」とあるから、これ

もまた同一人である。

湘君と湘夫人の姿は、『山海經』中山經には、

又東南一百二十里、曰洞庭之山、……帝之二女居之、是常遊于江淵。澧沅之風、交瀟湘之淵、是在九江之間、出入必以

飄風暴雨。是多怪神、狀如人而載蛇、左右手操蛇。多怪鳥。

と描かれていて、更に河川だけでなく、飄風暴雨も司るとされているのも水神の職能を鑑みる上で重要な記述である。

論者はかつて、『楚辭』九歌に就いて論じ、『山海經』に多く認められる、如上の蛇を驅使する形容から、一可能性としてではあるものの、「九歌」の「九」は、「虯」であり、蛇巫なる巫祝によつて歌われた歌謠であり、更にそれは水や異界との往來などと關連する祭祀に於いてであろうと述べたが、これは本論考とも大きく關連する。

水神である河伯・湘君・湘夫人と、巫彭・巫咸が、水死者であり、且つ蛇巫であつた可能性が、本章で指摘できたかと思う。

なお、この彭祖とは、『史記』楚世家には、

楚之先祖出自帝顓頊高陽。……高陽生稱、稱生卷章、卷章生重黎。重黎爲帝嚳高辛居火正、甚有功、能光融天下、帝嚳命曰祝融。共工氏作亂、帝嚳使重黎誅之而不盡。帝乃以庚寅日誅重黎、而以其弟吳回爲重黎後、復居火正、爲祝融。

吳回生陸終。陸終生子六人、坼剖而產焉。其長一曰昆吾、二曰參胡、三曰彭祖、……六曰季連、芊姓、楚其後也。

とあつて、「離騷」の作者、或いは主人公と同じく顓頊の末裔であつたことが知られるのである。

第四章 帝顓頊に就いて

ここで、この顓頊高陽氏の神格に就いて觸れておきたい。蔡邕の『獨斷』上には、

疫神帝顓頊有三子生而亡去爲鬼。其一者居江水是爲瘟鬼。其一者居□水是爲魍魎。其一者居人宮室樞隅處、善驚小兒。と、はっきり疫神顓頊とあり、『搜神記』卷十六にも、

昔顓頊氏有三子、死而爲疫鬼。一居江水爲瘧鬼、一居若水爲魍魎鬼、一居人宮室善驚人小兒爲小鬼。

とある。由來は不明であるが、この顓頊には、疫神の一面があつたことは疑いないようである。加えて、疫神としての顓頊の子三人の内二人が、河川に住まうとされている點は、甚だ興味深いことである。なぜならば、この顓頊には、後述する如く洪水神としての性格もあつたからである。『論衡』訂鬼に、

禮曰、顓頊氏有三子、生而亡去、爲疫鬼。一居江水、是爲虐鬼。一居若水、是爲魍魎鬼。一居人宮室區隅溇庫、善驚小兒。前顓頊之世、生子必多。若顓頊之鬼神、以百數也。

とある。内容は、『獨斷』『搜神記』と略同じであるが、『論衡』には、顓頊には他にも多くの子があつて、しかも鬼神が多かつたとしている。『史記』五帝本紀には、

昔高陽氏有才子八人。世得其利、謂之八愷。……顓頊氏有不才子。不可教訓、不知話言。天下謂之檮杌。

とあり、稻畑耕一郎は、この「檮杌」に就いて、

……『史記』五帝本紀の『正義』に引かれる『神異經』には、次のようにある。

西方荒中有獸焉。其狀如虎而大、毛長二尺、人面虎足、豬口牙、尾長一丈八尺。攪亂荒中、名檮杌。一名傲很、

一名難訓。

この人面虎身の惡獸「檮杌」の名で呼ばれたのは、鯀である。……『尚書』堯典禹貢や「夏本紀」によれば、鯀は、堯のとき、「群臣四獄」に推擧されて、洪水を治める任に當つたが、九年にして功ならず、舜によって羽山に殛されて死んだとされる。『山海經』海内經では、洪水を防ぐための「帝之息壤」を盗んだことによって、「帝」の命を受けた「祝融」によって、「羽郊」で殺されている。……

鯀は羽の地で命をおとした後、一説には、東夷に變じたといひ（五帝本紀）、また一説には黃熊（黃能）に化したといひ（『左傳』昭公七年、『國語』晉語）、また黃龍になったともいふ（『山海經』海內經郭注所引『開筮』）。「天問」には「化爲黃熊、巫何活焉」とあつて、「黃熊」説を踏襲し、かつその復活に「巫」の關與していたことをいふ。

鯀が死んでまた蘇つたように、父の顓頊にも再生復活の傳承が残されている。『山海經』大荒西經に、次のように見える。

有互人之國。炎帝之孫。……有魚偏枯。名曰魚婦。顓頊死即復蘇。風道北來、天乃大水泉。蛇乃化爲魚。是爲魚婦。顓頊死即復蘇。

「互人之國」は、郭注によれば「人面魚身」の國であるといふ。この文章では、「偏枯」の魚「魚婦」と顓頊との關係がよく理解できないが、顓頊が蘇つたものが「魚婦」なのであるか、その名は、顓頊の葬られたといふ地、「鮒魚」の山と關連があるかも知れない。四匹の蛇が、この陵墓を守つてゐるといふ。「偏枯」については、鯀の子とされる禹についても、『莊子』盜跖篇に「堯不慈、舜不孝、禹、偏枯」とあり、半身不隨の状態をいつたものとされるが、本來は、そこに非俗性——〈聖〉なる意味が認められていたのであろう。顓頊——鯀——禹、三者は、いずれも同系統——夏系——の洪水神とされる。

といふ。更に同氏は、

顓頊についての異常な出生、異常な形體、そして異常な死（再生）が傳わるのは、それが本來何らかの非俗的な性格聖なるものを備えた存在であつたことによるのではないか。そして、その視點からすれば、「五帝本紀」が、顓頊の事蹟を次のように傳えているのは、甚だ示唆的なものを含んでいる。

靜淵以有謀、疏通而知事。養材以任地、載時以象天、依鬼神以制義、活氣以教化、絜誠以祭祀。北至于幽陵、南至交阯、西至于流沙、東至于蟠木。動靜之物、大小の神、日月所照、莫不砥屬。

この記述は、『大戴禮』五帝徳とほぼ同文で、甚だ抽象的であるが、黃帝を始め、他の堯・舜・禹などに較べて「依鬼神以制義、治氣以教化、絜誠以祭祀」など、いつてみれば宗教や祭禮との關係のあつたことを窺わせる形跡を留めている。ここで想起されるのは、徐旭生『中國古史的傳説時代』が、顓頊を「鬼神的代表」「大巫」「宗教主」と指摘したことがある。

と論じている。^(注四)

顓頊に洪水神としての性格も附與されている點は非常に興味深い。或いは、洪水の後には疫病が発生するのが常であるから、その點に於いて關連づけられたのかも知れない。

『荊楚歲時記』五月の條には、先に引いた部分以外にも、「五月俗稱惡月、多禁。」とあり、「五月五日、四民并躡百草、又有鬪百草之戲。採艾以爲人、懸門戸上以禳毒氣。」とある如く、藥草を採つて疫病を除く爲の習俗の多いことも注目すべき點であろう。なぜならば、先述のとおりこれはそもそも送瘟船の儀禮だったからである。或いは、「離騷」に數多く詠まれている香草も、ここに通ずるのではないだろうか。

結 語 — 原「屈原」とは何か —

以上、ここまで論じて來たことを簡潔に纏めると、

- ① 「悲劇の憂國詩人「屈原」像は、後漢初期までに漸次形成されていったものと考えられる。そしてそれにはやはり劉向等が大いに關わっている可能性がある。
- ② 中國に於いての水神は、河川で溺死したものである場合が多く、「離騷」に見える「宓妃」も死して水神となつたもの

である。

③ 古代中國に於いては、巫祝を水に關連する祭祀で、犠牲とする習俗があった可能性がある。

④ 「屈原」の命日とされる五月五日には、本來的には送瘟船の祭祀儀禮が行われていた。また、遺體を長江に流されて潮神となった伍子胥を祭る儀禮もこれに習合されている。

⑤ 「離騷」の冒頭の自序「高陽」は、楚—延いては「屈原」の祖であるとともに、「彭祖」の祖でもあり、又更に疫神と洪水神の性格も持っていた。そして、本來は巫祝王であった。

⑥ 「離騷」に見える「彭咸」は、「巫彭」と「巫咸」であり、蛇巫であった。

の如くである。

それでは、いったいこの「屈原」とは何なのか。そして、なぜ、「屈原」が「離騷」の作者の地位を獲得するに至ったのか。

「離騷」で主人公が目指す先—崑崙山は、送瘟船が觀念的に行きつく場所でもある。ここで想起されるのは、荆楚の鼈靈の傳説である。この説話は揚雄が著したとされる『蜀王本紀』に見える。『蜀王本紀』は佚書であるが、四部備要に纏められたものを引用すると以下の如くである。

望帝積百餘歲。荆有一人名鼈靈。其尸亡去。荆人求之不得。鼈靈尸隨江水上至郫、遂活。與望帝相見、望帝以鼈靈爲相。時玉山出水、若堯之洪水。望帝不能治、使鼈靈決玉山、民得安處。鼈靈治水去後、望帝與其妻通。慚媿、自以德薄不如鼈靈、乃委國授之而去、如堯之禪舜。鼈靈卽位、號曰開明帝。

ここには、荆、つまり楚にいた鼈靈というものの尸が失せ、長江を遡上して郫に至って蘇り、洪水を治めて蜀の王になった云々とある。なお、王逸が、九歌・雲中君の「靈連蜷兮既留」に注して、「靈、巫也。楚人名巫爲靈子。」と言う如く、楚の

方言に於いては、巫祝を「靈」と言うことを付け加えておきたい。即ち鼈靈も巫祝であった可能性があるのである。これは或いは「離騷」冒頭の靈均にも通ずるかも知れない。ここからは、水死者がやがて水源たる上流に觀念上遡つてたどり着き、そこで再生して治水の力を得て水神となるという思想が明確に看取できるのである。なお、『淮南子』原道には、

昔者馮夷・大丙之御也、乘雲車、入雲蜺、游微霧、驚悅忽、歷遠彌高以極往、經霜雪而無迹、昭日光而無景、扶搖挻抱
羊角而上、經紀山川、蹈騰昆侖、排閭闔、淪天門。

との記述がある。これに據れば、黄河の水神で、本來溺死者でもあった河伯が、「離騷」の主人公の如く崑崙山を経て天に到達するとなっている。

論者は、原「屈原」が何かと言えば、恐らくは巫祝（蛇巫）であつて、汨羅に於いて人身供犠として捧げられた水死者であつたと考える。そしてそれは、觀念的に川を遡上させ再生させて治水神にする爲であつたのではと思ふのである。もしくは、疫病の蔓延した際に、疫神を異界（天）へ送る役割を負つたのかも知れない。その原「屈原」がやがて神格化されて治水神・汨羅の河川神になつたのではないか。「屈原」は、懷王の左徒、或いは三閭大夫とされているが、中國の神靈が次第に人格化されることは、先の河伯の例や彭咸が殷の賢大夫とされた例にも認められる如くである。こうして形成されていつた「屈原」が、何故に「離騷」の作者とされるに至つたのか。これは、意外に單純な理由かも知れないと思ふ。それは、「離騷」の首句に疫神で洪水神でもある「帝高陽」の苗裔とあり、「靈均」と、巫祝を思わせる自叙があり、更に「蛇巫」である「巫彭」「巫咸」の居る所に従ふとあることから推せば、この「離騷」もそもそもは蛇巫によつて用いられた祭祀歌謡であつたことが理解できるからである。つまり、蛇巫によつて歌われていた原「離騷」とも呼ぶべき歌謡が、やがて劉向の時代に至つて、同じく蛇巫であつた「屈原」に假託され、「屈原」が「離騷」の作者として扱われるようになったのではないかと推測するのである。

「離騷」が現在の形として成立する過程に關しては、飽く迄も推論の域を出ないけれども、論者は大別して三段階があつ

たと思う。それは、①楚地域の蛇巫によって歌われていた原「離騷」。②それを基に劉安が改作した「離騷」。そして、③劉向等が更に手を加え、悲劇の憂國詩人「屈原」の作となった、略現在の形であろう「離騷」である。

壽春の劉安のサロンに集まった文客の中には、當然その地域の習俗に精通した者がいたであろう。劉安傳には、武帝の詔に應じてとあるから、先に劉安がかかる歌謡のあることを武帝に伝え、大いに興味を抱いた武帝が献上を命じたのではないだろうか。それは劉安傳に、「旦受詔、日食時上」とあって、「離騷賦」がすぐに出来上がったとの記述があること、そして、現行の「離騷」に「崑崙山」など、いかにも武帝の興味を引きそうな句が多くあることから、想像に難くない。そして、その際に、より武帝の気に入るように手が加えられたと考えるべきである。つまり整理すると、論者は、

(楚の蛇巫の歌謡)

(武帝が秘藏としたもの)

(悲劇の憂國詩人「屈原」作)

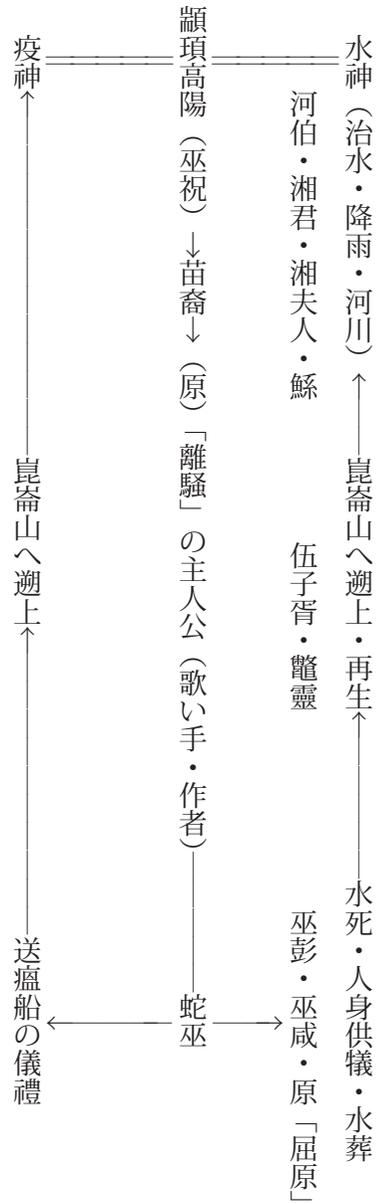
① 原「離騷」

↓②劉安「離騷賦」

↓③劉向ら 現行「離騷」

と言う段階があったと考えるのである。

以上を総合すると、「屈原」の由来は、汨羅に於いて、どのような形であれ水死した蛇巫であったと考えるのが穩當であること、そして、蛇巫であったこの「屈原」が、恐らくはそのあたりを承知していたであろう劉向等の手により、(この時点では劉安作であったが)同じく本來的には蛇巫によって歌われた歌謡であった「離騷」の作者とされた可能性があることが、本論で指摘できたと思う。圖に示せば、次の如くである。



本論は、傍證を用いての考察が多く、推論の積み重ねとなつてしまつたが、「屈原」を構成する重要な要素である水死と、「離騷」首句の高陽氏の神格、そして、やはり「屈原」傳説の一部である競渡習俗との関連性を指摘できた點は、今後の『楚辭』研究の一つの足掛かりになると考える。後日、これを踏まえて「離騷」本文に檢證を加え、より詳しく纏めたいと思う。

注

- (1) 稻畑耕一郎「屈原否定論の系譜」(『中國文學研究』第三期 一九七七年十二月所収)
- (2) 何天行「楚辭作於漢代考」(中華書局 一九四八年) 三三―三七二頁。圖は七二頁より轉寫。
- (3) 『漢書』賈誼傳の該當部分には、
誼既以適去、意不自得、及渡湘水、爲賦以弔屈原。屈原、楚賢臣也。被讒放逐、作離騷賦、其終篇曰、已矣、國亡人、莫我知也。遂自投江而死。誼追傷之、因以自論とある。
- (4) 高誘の淮南子敘には、
初安爲辯達善屬文、皇帝爲從父、教上書、召見、孝文皇帝甚重之。詔使爲離騷賦、自旦受詔、日早食已。上愛而秘之。
とあり、荀悅『漢紀』孝武帝紀・元狩元年には、
上以安屬諸父、甚尊重之。初安朝、上使作離騷賦、旦受詔、食時畢上。
とあつて、どちらも「離騷賦」に作つてゐる。
- (5) この他、董仲舒の士不遇賦に「若伍員與屈原兮、固亦無所復顧。」と伍子胥と並んで詠まれている。また、李陵の與蘇武書にも、「是以彭蠡赴流、屈原沈身。」

(6) の如く、「屈原」の名が現れている。
伍子胥は、『史記』に、

乃告其舍人曰、「必樹吾墓上以梓，令可以爲器。而抉吾兩眼縣吳東門上，以觀越寇之入滅吳也。」乃自剄死。吳王聞之天怒，乃取子胥尸盛以鸚夷革，浮之江中。

と記されているとおり、遺體を長江に流されており、後世では潮神になったとされている（『録異記』卷七等）。潮神も水神の二類である。

(7) 黃石『端午禮俗史』（鼎文書局 一九七九年）六七頁

(8) 黃石 前掲同頁。

(9) 宗櫟著・守屋美都雄譯注・布目潮瀨他補訂『荆楚歲時記』（平凡社 一九七八年）一五四頁

(10) 森三樹三郎『支那古代神話』（大雅堂 一九四四年）二四二頁

(11) この他、『漢書』郊祀志・淮南子『莊子』などに「巫咸」の名が見える。

(12) 稻畑耕一郎「曾侯乙墓の神話世界」（『中國文學研究』第十七期 一九九一年十一月所収）二二〇～二二三頁

(13) 拙論「楚辭」九歌攷（『二松』第二五集 二〇一一年三月所収）

(14) 稻畑耕一郎「顛頊とその苗裔をめぐる傳承についてのノート」（『中國文學研究』第六期 一九八〇年十二月所収）二一〇～二二二頁及び二一四～二一五頁
傍點原文

